

扇の学び

藤村 潔

Fujimura Kiyoshi

昔、ある学会で大学院生が研究発表したところ、フロアにいたある仏教学の大家から「ここは仏法を語る場所ではありません。仏教学会です。もう少し皆さんに配慮して下さいませんか」と辛辣な指摘を目にした。その時の経験があまりに強烈であったため、それ以来「仏教学」（学問）と「仏法」（信仰）という両面の距離感を私なりに強く意識するようになった。

「学問」の側面は、研究者として生きていく私の顔である。大学やセンターの場において仏教を文献学上対象化していく。そこには客観的に資料に向き合っている時間がある。一方、「信仰」の側面は、真宗人として生きていく私の顔である。僧侶として法務をする時に、ご門徒さんの前で必ず法話をするように心懸けている。そのときは、仏教教理の解説はしない。むしろ、現代人が抱えるさまざまな苦悩を、故人（先祖）を通して対話してい

く時間である。「学問」と「信仰」。すなわち私は、研究者の立場として学術交流をしつつも、その一方で身の事実はどこまでも真宗の人間である。

学生時代、一人の恩師の先生が、よく「扇」の話をしてくれた。「仏道を歩むとは扇である」と言われた。扇には「扇形」と「要」がある。「扇形」は、開けば広がる。「要」とは、それを支える芯である。

つまり、宗教学、仏教学、哲学、文学、歴史学、社会学を広く学ぶことは「扇形」に喩えられる。一方、それを受けとめる自分の主体的課題は「要」に他ならない。宗祖親鸞聖人、浄土真宗の信仰である。たくさんの方に取組み学ぶことは多いに結構。しかし、「扇形」が広がり過ぎると、知識や教養の世界に埋没してしまい、自己を見失う。その反対に、浄土真宗の言葉しか知らないと、「要」だけを眺めているようなものであるため、一向に自分の見識は広がらない。つまり先生は、仏教を志すことには、絶えず「学問」と「信仰」の両面があり、そのどちらも欠けてはならないと力説されたのである。そして「仏道を歩むとは「扇形」と「要」の永遠の往復である」と仰っていた。その恩師は七年前に還帰した。東京の地において仏教学・親鸞思想を学ぶ私は、恩師から教わった「扇の学び」を今なお守り続けている。

（ふじむら きよし・親鸞仏教センター研究員）

お知らせ

●『アンジャリ』第40号をお届けします。
●親鸞仏教センターでは、『アンジャリの会』を発足しています。この会は、親鸞仏教に親しみ、共に学んでいこうとする人たちの会です。入会者には、本誌『アンジャリ』、『親鸞仏教センター通信』等をお送りします。年会費が必要となります。お申し込みとお問い合わせは、電話・FAX・Eメール等で、左記までご連絡ください。

『アンジャリ』 第40号
2020年12月1日発行
発行者 本多弘之(親鸞仏教センター所長)
編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)
〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11
TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901
e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp
http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp
印刷・製本 大日本印刷株式会社
デザイン 北尾 崇(HON DESIGN)